様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６４３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２９８７

研究課題名（和文）日本古代移配俘囚・夷俘に関する考古学的研究

研究課題名（英文）Archeological study on forced emigration of Fushu or Ifu in the Japanese ancient times

研究代表者
平野　修（HIRANO, OSAMU）

帝京大学・文化財研究所・講師

研究者番号：９０６２０８６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：奈良・平安時代において律令国家から、俘囚・夷俘と呼ばれたエミシたちの移配（強制移住）の研究は、これまで文献史学からのみ行われてきた。しかし近年の発掘調査成果により考古学から彼らの足跡をたどることが可能となり、本研究は考古学から古代の移配政策の実態を探るものである。
今回検討を行った関東諸国では、馬匹生産や窯業生産などといった各国の手工業生産を担うエリアに強くその痕跡が認められたり、また国分僧尼寺などの官寺や官社の周辺といったある特定のエリアに送り込まれている状況が確認でき、エミシとの戦争により疲弊した各国の地域経済の建て直しや、地域開発の新たな労働力を確保するといった側面が強いことが判明した。

研究成果の概要（英文）：The study of Ihai (forced emigration) of Emishi called Fushu or Ifu has been performed until now from the legal codes nation in Nara, the Heian era only by documents historical study. However, I became able to follow their footprint from recent excavation result, and this study was going to investigate the actual situation of Ihai where an ancient nation went to from the footprint.
It was strong, and it was admitted, and, in the Kanto countries which it examined this time, the situation sent into a particular area such as the outskirts of a court-built temple and the government shrines such as Kokubunji and nun temples again could confirm the trace in the area to carry the manual industry production of each country such as horse production or the ceramics production on, and it became clear that the side to find new work force for rebuilding and community development of the regional economy of each country which became impoverished by war with Emishi was strong.

研究分野：考古学

キーワード：俘囚　夷俘　蝦夷　渡来人　強制移住　征夷　長煙道カマド　黒色土器

1. 研究開始当初の背景

日本古代において「蝦夷」と呼ばれた東北地方の人々は、奈良時代末期の宝亀年間から平安時代初頭の弘仁年間に至る律令国家の征夷事業に対抗した、いわゆる「東北三十八年戦争」に伴う敗北の結果、「俘囚」として全国各地に強制移住させられている。その移住先については『延喜式』や『和名類聚抄』によって「俘囚料稲」（図１）が計上され、「俘囚郷」「夷俘郷」がみえることなどから、移配先の諸国名は判明しているものの、詳細な場所までは特定できていない。またそれぞれの国における彼らの暮らしについても「狩猟を生業とし、養蚕を知らず」（『類従国史』延暦 17 年（798））、「弓馬の戦闘は夷獠の生習」（『続日本紀』承和４年（837））といった、僅かに残る文献史料から述べられているにすぎず、考古学では研究の俎上にも上がっていなかったのが現状であった。

道	国名（等級）	料稲額	道	国名（等級）	料稲額
東海道	伊勢（大国）	1,000束	山陰道	因幡（上国）	6,000束
	遠江（上国）	26,800		伯耆（上国）	13,000
	駿河（上国）	200		出雲（上国）	13,000
	甲斐（上国）	50,000	山陽道	播磨（大国）	75,000束
	相模（上国）	28,600		美作（上国）	10,000
	武蔵（大国）	30,000		備前（上国）	4,340
	上総（大国）	25,000		備中（上国）	3,000
	下総（大国）	20,000	南海道	讃岐（上国）	10,000束
	常陸（大国）	100,000		伊予（上国）	20,000
東山道	近江（大国）	105,000束		土佐（中国）	32,688
	美濃（上国）	41,000	西海道	筑前（上国）	57,370束
	信濃（上国）	3,000		筑後（上国）	44,082
	上野（大国）	10,000		肥前（上国）	13,090
	下野（上国）	100,000		肥後（大国）	173,435
北陸道	越前（大国）	10,000束		豊後（上国）	39,370
	加賀（上国）	5,000		日向（中国）	1,101
	越中（上国）	13,433	合　計		1,095,509束
	越後（上国）	9,000			
	佐渡（中国）	2,000			

図1 俘囚料設置国と料稲額

2. 研究の目的

本研究は、近年新たに得られた考古学的知見から、彼らの詳細な移住場所を明確化し、彼らがそれぞれの地域社会に及ぼした影響と果たした役割、そして彼らが辿ったその後について、全国規模で検討するものである。

3. 研究の方法

今回、俘囚・夷俘の移配痕跡を探るために考古学的指標とした遺構・遺物は、以下に示すように東京都多摩市の上っ原遺跡をはじめとする帝京大学八王子キャンパス構内遺跡群（以下、帝京構内遺跡群と称する）の発掘調査で得られた 9 世紀以降の竪穴壁外に長く延びる長煙道型のカマドを付設する竪穴建物と、そうした竪穴建物から出土した岩手県内の内陸部に濃密な分布を示す赤彩球胴甕をはじめとする東北系土器で、その中でも特に注目したのは黒色土器である（図２）。

長煙道型カマドは、東北地方では 7 世紀以降定着して以来、長く竪穴建物に用いられたカマドである。イエづくりに関する「こだわり」は、たとえ異郷地であっても、自身が建築に関わるのであれば反映されるものではないかと考え分析視点とした。

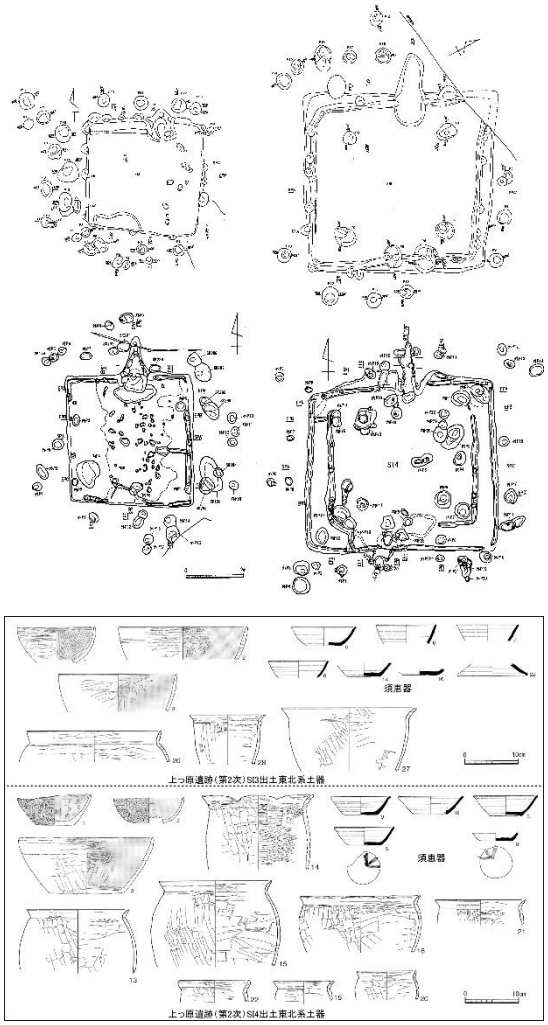

図2 上っ原遺跡の竪穴建物と出土土器

一方の黒色土器は、非回転（ロクロ）、回転（ロクロ）使用問わず、体部内面を中心に入念なヘラミガキを施し、さらに内面に炭素吸着による黒色土器処理を施す土器である。こうした黒色土器もまた東北地方では古墳時代以来一貫して作られ続けてきた土器であり、東北地方以外の地域では、都城をはじめ 8 世紀後半以降、新たな土器として登場してくる。その出現の契機となったのは、まさしく征夷であり、征夷に関わって行われたエミシの移配が最大の契機となったと考えている。そして黒色土器の普及については、移配先の国府や郡家などの地方官衙や、それらと密接に関わる集落で行われる饗宴時における身分表象のための食膳具および儀器が必要であったからだと考えている。

4. 研究成果

当初の計画では全国の移配地が対象であったが、本課題の採択が、初年度後半であったため研究期間が短縮され、予算も大幅に減額されたため、その対象地域を東京、山梨、神奈川、埼玉、群馬、千葉、茨城、栃木といった関東地方に絞り検討を行った。

打合会等で先に平野が示した考古学的指標をもとに各都県の検討をお願いした研究協力

者の方々に対して検討をお願いしたが、神奈川や埼玉・群馬などでは、7 世紀段階から長煙道型カマドを付設する竪穴建物は多々みられ、基本的な竪穴の構造に大幅な違いがみられないことや、黒色土器についても埼玉・群馬両県とも一部地域を除き相対的にその出土量が少なく分析対象にしづらいという状況にあるという指摘も受けた。しかしそのような状況であっても、まずは 9 世紀以降における状況の検討をお願いした。

検討の結果、9 世紀以降における長煙道型カマドを付設する竪穴建物の確認状況は、概ね 9 世紀第 1 四半期からみられるようになり、9 世紀中葉段階と 10 世紀前葉段階にピークを迎える遺跡が多いことが判明した。7 世紀段階からすでに顕著な存在を示す埼玉や群馬でも、9 世紀初頭段階に竪穴建物数自体が増大し、それまで集落が営まれていなかった地域にも新規に集落が展開していく状況を確認することができた。

しかしピークを迎えた時期でにあっても長煙道型カマドを付設した竪穴建物は客体的な存在であり、多摩丘陵といった丘陵地では、1～2 棟だけで構成される、いわゆる「離れ国分」的な集落様相を示す遺跡が多く、拠点的な集落遺跡でも、集落の中心から外れた場所に位置するなど、客体的なあり方を示している。

また長煙道型カマドの構造をみると、東北地方北部で一般的にみられるそれの構造を忠実に再現されていないことも判明した。そしてたとえ長煙道型カマドを付設する竪穴建物であっても出土する土器は、各国とも当時その国で広く流通していた土器であり、赤彩球胴甕や、後に紹介する底部に放射状痕跡といった明確な東北系土器は、非常に限定された遺跡でしかみられないことが判明した。そしてその他生業具をみても、農具、狩猟具、漁労具、紡織具であり、長煙道型カマドがみられない他の集落と変わりはなく、このことは、在地住民と同化した生活を営んでいたことを物語っており、こうした状況は数世代を経過した渡来人集落のあり方と共通する。

次に各国における長煙道型カマドを付設する竪穴建物がみられる遺跡の状況については、各国とも馬匹生産や窯業生産、紡織生産などといった手工業生産を担う郡や郷、そして国分僧尼寺などの官寺や官社の周辺といったエリアに顕著にみられた。それら地域の多くは、ヤマト王権段階に屯倉地となり、渡来人を数多く入植させた地域であることが判明した。そして後の令制段階では、常陸・上総・上野国のように親王任国となったり、それに伴い勅旨田や親王賜田、御牧などが設置されるなど、皇室の直轄地的なエリアであることも判明した。

今回の検討では前述のように、8 世紀後半から 9 世紀初頭における「東北三十八年戦争」段階における俘囚・夷俘の移配状況を中心としたものであったが、蝦夷の移配は単に当該期に限定されるものではないことも研究協力者の菅原祥夫氏の検討によって確認することができた。

菅原氏は、近江における栗囲式土器や土師器羽釜といった土器、陸奥における初期渡来系瓦などの検討、さらに木簡資料や文献史料にみえる郡郷名のあり方から、初期城柵設置される天智朝の段階から製鉄技術導入のために陸奥は近江や安芸といった製鉄先進地との間で人材の相互交流があった可能性を指摘した。それは単なる近江の人との交流ではなく、近江は伝統的な渡来人の集住地であり、そこには製鉄技術をもった渡来人が数多くいたことは容易に想像できることから、陸奥と近江の間で大化前代から蝦夷や渡来人の往来した可能性を指摘され、文献史学の立場から平川南氏は蝦夷と渡来人の移配先は重なることが多く、それは異領域の結節点や交通の要衝地で強く発現することが指摘されており、それが今回の考古学的検証により裏付けられることとなった。本検証は、征夷最盛期以前におけるエミシと渡来系工人との技術交流も念頭に置いて、征夷最盛期の移配を考えなくてはならないことを提起した卓見と言える。

また、俘囚・夷俘移配段階で出土した赤彩球胴甕をはじめとする東北系土器については、研究分担者である河西学氏が鉱物学的胎土分析を行った。その結果、いずれの東北系土器も移配先の粘土等を使用し作製された可能性が高いことが判明した。土器の胎土分析は、人の動きの多様性を考えるには不可欠な分析であり、近江の東北系土器についても今後胎土分析を行っていくべきであり、新たな課題も得ることができた。

最後に今回の課題で俘囚・夷俘の痕跡を探る上で今後、新たな考古学的指標となり得る資料群を挙げておきたい。

① 「狄」「征（征）人」の文字がみられる墨書土器（図3）

今回の検討の中で山梨県韮崎市に所在する宮ノ前遺跡で「狄」「征人」墨書土器ともに 9 世紀後葉の竪穴建物から出土している。宮ノ前遺跡は巨麻郡家関連および牧関連遺跡として注目されている。また近年では、埼玉県熊谷市に所在する宮下遺跡（2017 年 11 月時点では未報告）でも出土していることが判明。宮ノ前遺跡と宮下

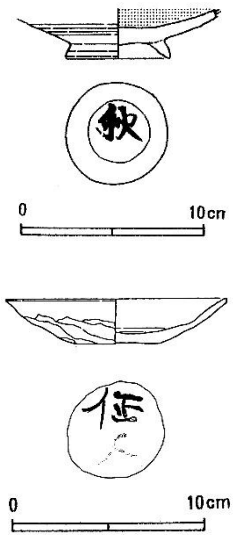

図 3「狄」「征」銘墨書土器

遺跡は、8 世紀後葉から 11 世紀にかけて営まれた集落遺跡で、小鍛冶や中世に下る牧関連の長大な溝が検出されているという。

② **底部外面に放射状痕跡がみられる黒色土器を含む土師器高台椀・皿（図4）**

当該土器は 9 世紀後葉以降、青森県や岩手県北部に主に分布する土器であり、俘囚のその後の動きを探る上で重要な資料だと思われる。

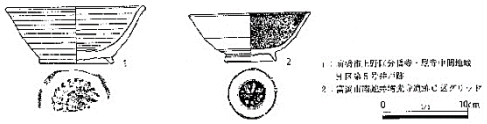

図 4 放射状痕跡をもつ土器

③ **鉄鐸（図5）**

本資料は関東地方では主に長野県域でみられ、山梨県でも長煙道型カマドを付設する竪穴建物が顕著であった百々遺跡でもわずかながら出土している。その時期は古墳時代後期からみられるが、顕著となるのは 10 世紀～12 世紀にかけてであり、本資料もその後の東北地域との交流を考える上で重要な資料となろう。

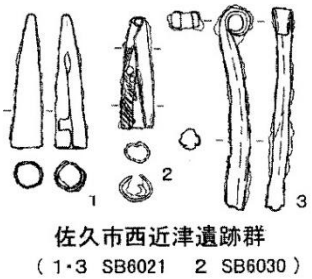

図 5 西近津遺跡出土鉄鐸

④ **茨城県水戸市二の沢 B 遺跡出土の「幡田郷戸主君子部～」と刻書された刻書紡錘車（図6）**

本資料は二の沢 B 遺跡から出土し、9 世紀前葉とされている。「君子部」は「吉弥侯部」や「吉美侯部」とも書くが、その構成の主体は俘囚であり、常陸国では多珂郡、久慈郡、那賀郡に主に分布している。郷名や記した対象が紡輪であるため、紡織に深く関わった集団と推測される。

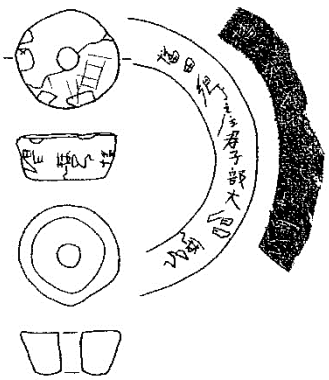

図 6「君子部」銘刻書紡錘車

⑤ **切先斜め棟刀（図7）**

古代の武具に詳しい研究協力者である津野仁氏によれば、切先斜め棟刀は東北北部が分布の主体であり、「蝦夷系武装」と呼んでいる。9 世紀中・後葉～11 世紀まで、秋田県北部から青森県域にわたって確認できるといい、内国では栃木県五郎助内遺跡 9 世紀中葉の竪穴建物から出土している。

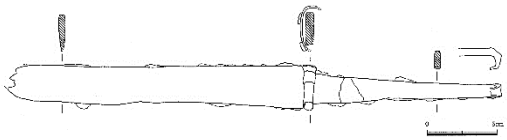

図7 助五郎内遺跡 SI9 出土切先斜め棟刀

⑥ **二条引手轡（図8）**

二条引手轡は古墳時代からみられるが、途中一旦途絶え、7 世紀後葉から末期古墳で再びみられるようになるという。この時期では新羅や渤海で二条引手轡を用いられていることから、列島外からの技術系系譜が考えられている。その後 8 世紀中葉から 9 世紀初頭になると多賀城周辺域でもみられるようになり、9 世紀代に入っては栃木・群馬・茨城・長野県域でもみられるようになる。10 世紀代では捻りがないタイプの引手が埼玉県宮西遺跡で確認されている。

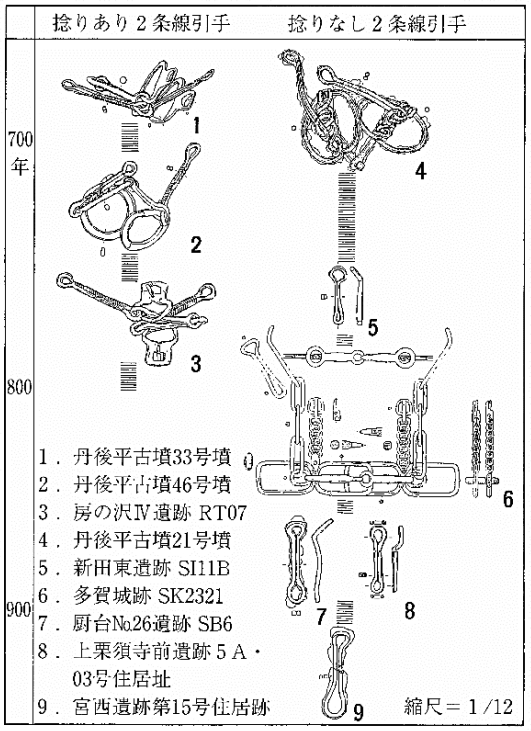

図8 二条引手轡の出土事例

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 平野修、武蔵・甲斐における俘囚・夷俘痕跡、帝京大学文化財研究所研究成果公開シンポジウム「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会、査読無、2017、41-80

② 河西学、古代東北系赤彩球胴甕の胎土分析による産地推定―岩手県立花南遺跡・八幡遺跡、東京都多摩市上っ原遺跡の事例―、帝京大学文化財研究所研究成果公開シンポジウム「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会、査読無、2017、219-227

③ 平野修、韮崎市宮ノ前遺跡出土の『狄』と記した墨書土器、山梨県考古学協会誌、査読無、25、2017、189-196

④ 平野修、平安時代黒色土器の出現の契機とその系譜（予察）―甲斐・信濃両国の事例から―、信濃、査読有、69-3、2017、19-44

⑤ 平野修、日本古代俘囚の移配に関する考古学的検討―9 世紀における甲斐国の事例―、山梨県考古学協会誌、査読無、23、2015、19-34

〔学会発表〕（計２件）

① 平野修、武蔵と甲斐における俘囚・夷俘痕跡、帝京大学文化財研究所研究成果公開シンポジウム「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会、2017 年 11 月 25 日

② 平野修、「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会―考古学からみた俘囚・夷俘の足跡―、多摩市教育委員会・東京都埋蔵文化財センター共同事業文化財講演会（招待講演）、2018 年 2 月 24 日

〔図書〕（計０件）

なし

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

平野　修（HIRANO, Osamu）
帝京大学・文化財研究所・講師
研究者番号：９０６２０８６５

(2)研究分担者

河西　学（KASAI, Manabu）
帝京大学・文化財研究所・講師
研究者番号：　６０５７２９４８

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

平川　南（HIRAKAWA, Minami）
大隅　清陽(OSUMI, Kiyoharu)
武廣　亮平(TAKEHIRO, Ryohei)
原　正人(HARA, Masato)
柴田　博子（SHIBATA, Hiroko)
高橋　千晶(TAKAHASHI, Chiaki)
杉本　良(SUGIMOTO, Ryo)
君島　武史(KIMISHIMA, Takeshi)
田尾　誠敏(TAO, Masatoshi)
田中　広明(TANAKA, Hiroaki)
渡邊　理伊知(WATANABE, Riichi)
郷堀　英司(GOHORI, Eiji)
栗田　則久(KURITA, Norihisa)
佐々木　義則(SASAKI, Yoshinori)
早川　麗司(HAYAKAWA, Reiji)
津野　仁(TSUNO, Jin)
菅原　祥夫(SUGAHARA, Sachio)
保坂　康夫(HOSAKA, Yasuo)
原　明芳(HARA, Akiyoshi)